Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

012

『京阪神連合保育会雑誌』にみられる子ども観

――1910年代における保母たちの「自由保育」と「自治」――

桜井智恵子
（大阪市立大学大学院）

1．研究の目的

新教育運動は明治30年代に欧米から日本に入り、その自由教育、児童中心主義、自発をおもんじる生活教育や労作教育などの思想が、大正時代に爛熟した。その結果、保育現場でも、幼児の個性をおもんじ、無用の干渉を避けて自発・自動・自治の習慣をつけることが主張されるようになった。

大正時代の保育内容をみると、恩物による形式的な保育が減り、自由遊びや戸外保育が多くなっている。また、新教育運動の影響により、幼児中心の保育をする園がみられるようになり、保育方法に対する新しい試みも盛んになされた。一方、これらを無批判に取り入れることに対する反対の意見なども現れ、いわば新旧さまざまな考え方に基づく保育内容や指導法が入り混じった。しかし、大正中期以降に繰り広げられる学校における新教育運動より一足早く、子どもへの認識を新たにした点で、保育は一般的な小学校のような集団管理教育とは異なった道を選び取った。さらに、これからは「小学校に幼稚園の真似をさせよ」といった意識が保母たちに行き渡り、新しい保育への意欲をかき立てていった。

では、この時期、自由保育に何が求められたのであろうか。また、子どものどこに焦点が当てられていたのであろうか。いわゆる子どもに関する著作を通して当時の子ども観を検討してゆくとき、観念的なものに留まり、現実の子どもに対する認識が欠けている点が先行研究で指摘されてきた。

そこで本論文では、明治30（1897）年に設立された京都・大阪・神戸の３市の保育会の連合体である京阪神連合保育会発行の『京阪神連合保育会雑誌』より、園長や保母の声を拾い自由保育をめぐる意見の傾向を分類し、検討する。また、当時の知識人の「自治」の理解と比較し考察することを目的とする。

2．自由保育をめぐる保母の議論の傾向

京阪神連合保育会は毎年１回、３市交替に大会を開催し、会員一同の研究発表および各地区保育会提出の問題協議を中心に、会員相互の向上発展に寄与し、保育団体の中ではもっとも活躍し注目された保育団体であった。

自由保育に関しては、はやくも大正２年５月25日に開かれた第20回京阪神連合保育会での研究題「保育上ノ自由主義ヲ採用セラルヽ実験談ヲ承リタシ」（第31号、大正２年７月）の下に議論の場が持たれている。モンテッソリー教育に関しても、神戸幼稚園が中心になり、大正２年には器具の貸し出しも請け負い、京阪神の幼稚園にいち早く取り入れられた。

「自由教育」の理解は、各市、各園、各保母によってさまざまであった。モンテッソリー、フレベール、デューイ、ドルトンプラン、プロジェクトメソッドなど、新教育が大いに議論され、日常の保育に現場の保母たちによって、取り込まれようとした。

大正期の『京阪神連合保育会雑誌』にみられる保母の「自由保育」をめぐる議論の傾向を分類してみると次のようになる；①フレーベルとモンテッソリーの保育方法の比較　②自由保育と規律　③自由保育における干渉の度合い　④自由保育をどの程度まで用いるべきか　⑤自由保育の環境　⑥日本独自の自由保育の構築について。③から⑥は保育の具体的な方法が中心となっているが、①と②ではとくに「子どもの自由」や「子ども中心」という点に関して意見が交わされた。

その中でも、神戸幼稚園の望月クニと大阪江戸堀幼稚園の膳タケは、明治末期から大正期にかけて『京阪神連合保育会雑誌』にもたびたびその名前が登場し、オピニオンリーダーとして活躍した。

膳は、「幼児の知的活動に対して無制限的自由主義をとり、他人の干渉束縛を厳禁し幼児の自己教育を唱導」することを主張した。（「関西保育界とモンテッソリー女史教育思想」第35号）また、神戸幼稚園園長望月クニは京阪神連合保育会をリードし、全国保育会の中心勢力として活躍した。彼女は、保育者が「あまり口数を利かず側に控えていて専ら児童中心主義」を取り、「児童に自制自決の習慣を与へる」ということをモンテッソリー主義を論ずる中で力説した。（文部省普通学務局「全国幼稚園関係者大会記録」大正５年３月）彼女らの主張で「自己教育」や「自制自決」に重点が置かれていたのは何が目的であろうか。それは自立であった。子ども自らが自分の世界を造ってゆく

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

ことが、子どもが自立する道であると考えられていたのである。

このようにして、自由保育は全国的に行き渡った。ところが、大正８年10月に大阪で催された第２回全国幼稚園関係者大会では、準備された講演はふたつとも自由保育に関するものでありながら、現場関係者から提出された協議題の半分は「幼児への文字教授」に関するものに集中した。これは、現場保母の関心が自由保育だけでなく、「早教育」にも寄せられていたことを示す。

ところで、大正７（1918）年、倉橋惣三を中心とするフレーベル会は各地の代表的な幼稚園を選んで幼児訓練の標的という題で回答を求めた。その目標の第一位には「自主独立」が挙げられ、第二位が「従順」であった。これは、森川正雄がいう「旧方法では服従が第一の徳とされたが、新方法では自爲自奮が重要なものとされる」（『幼稚園の理論及実際』大正13年）という分析とも重なる。すなわち、明治から大正の過渡期にあって、「自主独立」と「従順」という両課題の価値が同時にめざされていたという状況がみられる。

このように、実際には、「自由保育」を深める議論よりも「自制自決」であるとか、「自主独立」といった言葉が先行し、子どもの積極性が保育の目的とされることが多かった。また、いずれの議論も子どもの自主性が主眼とされ、子ども同士の相互関係に関しては自主性とは異なる議論として扱われた。これは、自主性が主に積極性と重なって認識されていたためと思われる。

３．知識人の「自治」理解

次の一文は「男子と保育」と題した新聞記者の筆によるものであり『京阪神連合保育会雑誌』に抜粋・掲載された。「女性化したる園児は動もすれば女のように神経的となり、早熟性となり、非男子的となつて、著しく自治、自裁の精神と耐忍、奮闘の意気を消沈せしむる傾きがある」。（大阪毎日新聞　橋詰良一氏、第31号、大正２年７月）ここでいわれるところの「自治」は、子どもが自らの世界を創造するといった考え方と関連して展開されたものではなく、徳育といった色合いを帯びていることが見て取れる。

また、お伽噺作家として日本の児童文化に大きな貢献をした巖谷季雄は、次のように述べ「積極性」の重要さを主張した。「明治大正となつて世界の人間を相手に之れと競争していかねばならぬ（中略）意気地のないことを云つてると外から元気のいゝ欲張り者がドンドン遠慮なく喰ひ入つて繰るそれでは到底立ち行かぬウンと欲張りの出しや張りで総てが積極的の人間でなくてはならぬ黙つて我慢している土台石（意志）よりは上からグイグイ圧迫する漬物石（意思）でなくてはならぬ…積極的に進んでいて之れに含まれた精神が明治大正の子供に必要であるからである」。（「お伽噺に現れたる時代思潮」第33号、大正３年７月）

さらに、モンテッソリー法の研究で当時の保育界に影響を及ぼし、後に発行される『八大教育主張』（大正11年）のなかで「自動教育論」を展開する河野清丸の論考が『教育時論』から抜粋され掲載されている。「今や日本は世界の日本である戦後に於ける政治経済並びに一般文明上の競争地は果して何地に移らんとするか吾人日本民族は之を対岸の火災視するを許すや否や（中略）此の競争に勝つの道如何唯力ある国民パワフルなるエフシェントなる国民を措いて他に之を求むることは出来ない而して是等国民を養成するの道は一に自動教育に頼るの外なきを思へば門氏の研究亦一日も之を忽にすることは出来ないと思ふ」。(「モンテッソリー教育法の功罪」第36号、大正５年２月）

ここでは、国民を養成する道としてモンテッソリー教育が論じられた。これらの思潮の背景には、第１次世界大戦に参戦した時局の状況が反映していよう。それは、互いに遊戯や歌を紹介しあう「保育会提出遊戯及び歌曲」に戦争にまつわる歌詞がこの時期に多くみられるところからも分かる。

これらの子ども観は、児童中心主義の「自治」の考え方とは、はっきりと異なる方向へその鉾先を向けようとしていた。

４．考察および結論

以上、『京阪神連合保育会雑誌』を参考に、自由保育思想受容期の子ども観についてみたきた。

保母の中のオピニオン・リーダーの議論は、「児童中心主義」や「自由主義」の保育方法を中心に展開された。しかし、一般の保母たちは、必ずしも自由保育中心で保育内容・方法を構成していたというよりは、科学主義の流入や価値の多様化により、混迷している様子が垣間見える。

「自治」という概念もまた、立場によって「児童中心」とは異なる位相で読み取られていたことが分かった。すなわち、子どもの「自治」や「積極性」の価値化は、保育現場では子どもの自立にその目的が求められるが、それは一方では、徳育主義という目的に直結しやすい条件をも有していたといえる。

NII-Electronic Library Service